

一刻

宮本百合子

青空文庫

制限時間はすぎているのに、電車が来なくて有楽町の駅の群集は、刻々つまつて来た。

「もうそろそろ運動はじめたかい」

人に押されて、ゆるく体をまわすようにしながら、蔵原さんが訊いた。

「これからだ」

江口さんは栃木県で立候補した。新しくなろうとして熱心な村の人々にとって、根気よい産婆役をしているのであった。

「しかしね、モラトリウムでいくらかいいかもしれないよ。――

この間うちの相場は、二百円だった」

「一票が、かい？」

「ああ。百円じやいやだというそうだ。東京じや米で買う奴が多いらしいね」

そこへ、一台電車が入って来た。プラットホームの群集は、例のとおり、止りかかる電車目がけて殺到した。すると、高く駅員の声が響いた。

「この電車は、南方より復員の貸切電車であります。どなたもおのりにならないように願います」

丁度目の前でドアが開いて、七分通り満員の車内の一部が見えた。リュックをかついで、カーキの服を着て、ぼんやりした表情の人々の顔が、こちらを向いている。ああこれが、有楽町か、と

いう心もちの動きの出ている眼もないし、ひどい人だ、と思つて投げられている視線もない。少し奥には、「ねんねこ」おんぶをした女の横姿も見えた。

「みんなやせてるね」

「蒼いや。な」

日頃あれほど粗暴な群集も、その場からちつとも動かず、カラリと開いているドアの方に注意をこらした。

「ぼーつとしているねえ、みんな」

そのうち、その電車は駛り去った。次に、又京浜が来て、私どもは、揉み込まれた。

上野へ来た。「降りますよう」

「降せ！ 降せたら……」

大騒動になった。しかし、エンジンの工合が損じ、ドアは開かないまま、上野を出てしまった。

鶯谷へついたとき、人々はせき立って、窓から降りはじめた。

男たちばかりが降りている。そのうちやつと、ドアが開いた。

出口に近づいて行ったら、反対の坐席の横の方から、若い女が、おろおろになって

「あの、この辺にシヨール落ちていないでしょうか」

「こんなこみかたじゃ、落ちるせきがないですよ」

「どうでしょう！ 舶来のシヨールで母さんの大事にしている

のを、さむいからってかりて来たのに」

「降りるさわぎのとき、とられたのかもしれない。ずっと引っぱって、とるんですて」

「まア！ わたし帰れないわ、どうしましょう。届けたって、出ないでしょうね！」

「出ますまいねえ」

縫りつくようにきかれた男は、苦笑ときの毒さを交ぜてぼんやり答えている。

「困っちゃったわ、全く。今日はじめて出たのに、こんな目に会って……」

半分啜り上げるような早口で歎く娘は、空のリュックを吊って

前へうしろへ揺られているのであった。

〔一九四七年九月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

初出：「談論」

1947（昭和22）年9月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一刻

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>